慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ヨーゼフ・ロートにおける放浪と祖国：移民と多民族主義についての考察
Sub Title	Wanderschaft und Vaterland : Einwanderung und Multiethnizismus bei Joseph Roth
Author	野端, 聡美(Nobata, Satomi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2015
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.109, No.2 (2015. 12) ,p.129- 138
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	和泉雅人教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01090002-0129

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヨーゼフ・ロートにおける放浪と祖国
── 移民と多民族主義についての考察 ──

野端　聡美

0.　放浪がもたらすアイデンティティの揺れ

19世紀末から20世紀初頭の中欧を巡る状況を描いた作家ヨーゼフ・ロート Joseph Roth(1894-1939) は、ヨーロッパに少数派として生きるユダヤ人、そして多民族主義というテーマに生涯を通じて取り組んだ。このロートの取り組みを特徴づけるのは、一つ目に、ユダヤ人としての自らに、そして同族に課せられた「放浪」という宿命と、それによって揺らぐアイデンティティへの視点。そして二つ目に、パリ亡命時には既に解体していたオーストリア・ハンガリー君主国を追憶し、多数の民族が共存した理想的な国家体制として描く姿勢である。

一つ目の「放浪」という行為を、ロートは単に移動として捉えていたわけではない。彼にとって放浪とは、同じ民族間に亀裂や齟齬を作り出すものであり、その差異は個人の、そして共同体としての「ユダヤ人」の在り方を揺るがし、苦悩と共に新たなイデオロギーを生み出すものである。1927年に出版したエッセイ「放浪のユダヤ人　Juden auf Wanderschaft」でロートは西欧、アメリカへ行き移民として暮らす東方ユダヤ人の苦境を同情込めて描いているが、彼らの苦悩は、少数派として差別され不当な扱いを受けることのみではない。同時に、東方の故郷に住むユダヤ人親族や知人との間に生まれる断絶は、ユダヤ人としての自らの在り方を再考せざるを得ない状況に彼らを追い込み、西に同化した者も、故郷に残る者も「民族的同一感」を持ち続けるために足掻かなくてはならなくなる。

ただし、都市に暮らすユダヤ人が故郷に暮らす者と相容れなくなる、という事態は決して新しいものではない。哲学者ハンナ・アーレント Hannah Arendt

(1906-1975)は、ベルリンに生まれ育ち知識階級と盛んに交流したユダヤ女性ラーエル・ファルンハーゲン　Rahel Varnhagen von Ense(1771-1833)を取り上げ、ヨーロッパの社交界に生きるユダヤ人の苦悩を著書「ラーヘル・ファルンハーゲン Rahel Varnhagen : Lebensgeschichte einer deutschen Jüdin aus der Romantik (1959)」にまとめている。ラーエルは大都市ベルリンでは自らのユダヤ性に悩み、「ユダヤ人であることから脱け出したかった[1]」が故に、ヨーロッパ貴族との結婚を強く望んだ。彼女は若い頃ブレスラウに「田舎の親戚」を訪ね、その惨めな暮らしぶりを見て、ベルリンのユダヤ人として「成功した自分」に誇りを感じる、という体験をしている。[2]

ロートが「放浪のユダヤ人」において取り上げた東方ユダヤ人もラーエルと同じように、移住した先の土地に同化しきれぬユダヤ人としての自分と故郷の同族との間に生じた亀裂に悩むと同時に、ユダヤ民族の在り方そのものの曖昧さにも直面しなくてはならなかった。西方への同化とは、すなわちユダヤ人であることの境界線を飛び越えてしまうことであり、共同体から逃げることである。ロートが書く言葉によれば

> 同化は、例えそれが外面的なものに過ぎないとしても、一つの逃亡である。もしくは、迫害される民族の悲しい共同体からの逃亡の試みである。[3]

そして、共同体から逸脱した者に向けられる非難の視線を次のように書いている。

> 東方ユダヤ人が信仰を持たぬ者に抱く軽蔑の念は、彼自身に向けられうるものより何千倍も大きい。
> …個人的な、民族的な自由を保証するようなどの法律も、（彼にとっては）関心の対象とはならない。真の善が、人間によってユダヤ人にもたらされることはありえないのだ。[4]

このように東方ユダヤ人のアイデンティティを巡る問題を取り上げる中で、ロートは自らが考える「ユダヤ性」を徐々に明確にしていく。そして、「ユダヤ民族」としての在り方について分裂してしまった同族の考えについて「シオニズム運動」を取り上げている。

1.民族の在り方を巡っての断裂

「放浪のユダヤ人」には、西方に同化してしまう同族には激しい拒否感を示す東方ユダヤ人が描かれるが、彼らは決して「ユダヤ人としての民族国家」を希求することは無い。ロートは彼らを「神のユダヤ人」と呼び、西ヨーロッパ人が呼ぶところの「民族的ユダヤ人」から区別する。「神のユダヤ人」達は、「滑稽極まりないヨーロッパ的手段によってユダヤの国を打ち建てようとするシオニストを…憎むのである。というのも、その国はメシアの到来を期待しておらず、そして必ず起きるはずの神の意味の変容をも待ち望んでいなかったがゆえに、もはやユダヤの国とは言えない」からである。[5]

ロートは、1930年代に高まりを見せたシオニズム運動は間違い無く西ヨーロッパの精神に基づいたものとして批判し、シオニストが目指す「ユダヤ国家」とはヨーロッパ諸国とは変わらないものであり、そこに住む事になるであろう者には「ユダヤ人は一人もいない」であろうと語っている。[6]

同じような民族間断裂の例を一つ挙げたい。古くからヨーロッパに流入し、マイノリティーとして存在し続ける民族であるジプシー(現在はロマという呼称がポリティカリー・コレクトであるとして採用されている)は、その多くが中欧、東欧にコミュニティを作って暮らしている。特に東欧では郊外や地方の居住区に半強制的に閉じ込められ、居住国の政府や地元行政による同化政策にさらされている。彼らを地域社会にどう受け入れるべきかは多くの国でマジョリティーが直面する課題ではあるが、同時にジプシーという「民族」間にも溝が生じている。

コミュニティや居住区から出ず、「伝統的な」暮らしを営むジプシーと、都市で高等教育を受けジプシーの民族的独立性を訴え始めたジプシーとでは、それぞれが考える「民族としてあるべき姿」には大きな隔たりが生まれている事は容易に想像される。

2009年以降毎年プラハで開催される「カモロ・ワールド・ロマ・フェスティバル　Khamoro World Roma Festival」は、ジプシーに対するマジョリティーの理解を深めること、そしてジプシーが自己発信できる場を提供することを目的としている。筆者が参加した2010年5月23日から29日のフェスティバルでは、中心となる催しはジプシーの「伝統的な」歌や踊りの披露である。中にはロック音楽

やジャズ音楽と融合させたものも散見されたが、路上やコンサートホールで披露されているものの多くは、エキゾチックさを前面に押し出している。一方ほとんど注目されずにはいるが、もう一つの重要な催しは「有識者会議(パンフレットには、Expert Programmeと記載)」である。各国のロマ事情を研究している学者やロマの出自を持つ活動家が意見交換をする場を設けることにその主眼を置き、「ロマ・アイデンティティ(ロマの言語、文化、宗教、教育)について議論」することを目指している。テーマ設定の動機として、「世界から集まる様々な分野の専門家の意見交換を通じ、ヨーロッパにおける最多のマイノリティーグループであるロマについて、新たな見解を得、多くの事を学ぶ[7]」ことができる、としている。

欧米の高等教育を受けたロマ族出身の研究者や活動家には、「ヨーロッパ人が与えたイメージからロマが自らを解放し、独立した民族として主張する」事を目指す者が少なくない。ロマの民族的独立を目指し「ロマ国家Roma Nation」の設立を目指す者達もいる。1971年に設立された「国際ロマ連合International Roma Union (IRU)」は、ヨーロッパ全土に散らばるジプシーが同一民族としてのアイデンティティを共有し、権利を主張していくことを目指している。パスポートの交付、民族旗の採用、「国際ロマ憲章 International Romani Union Charter」を制定するなど、IRUの活動は全世界のロマの代表機関として自らを規定し、ロマは「同じ伝統、文化、起源、そして言語を共有している」民族であることを世界に認めさせることを目指している。国家やテリトリーを持たぬ形ではあるが、民族としてのロマの承認を国際社会に求めたものである。

IRUの主要なコンセプトは「国家なき民族　a nation without a state」であり、この連盟は国連や欧州の国際機関などに対しても、他の加盟国と同等の立場を主張するようになれることを目指している。まさに、この民族のあり方はユダヤ人のシオニズム運動に触発されたものであると言える。一方、このような「同じ伝統、文化、起源、言語を有する民族」としてアイデンティティを統一する動きには同じロマグループからの反発も見られる。生きている土地への「土着性」を主張し、「国際ロマ連盟」が提示する民族的定義に括られることに反発したロマグループは各地に見られるのだ。[8]

2. シオニズム運動

「民族の定義」を巡る民族間の亀裂の一例として、ジプシーを例に挙げたが、再びロートに戻る。ロートが描いたシオニズム運動に対する批判を以下に取り上げたい。

> 「民族の概念」は西ヨーロッパの学者が創り出し、説き起こそうと努めてきたものである。…近代のシオニズムはオーストリア、ウィーンに生まれた。一人のオーストリア人ジャーナリスト[9]がそれを創始したのだ。[10]

ロートは、シオニズムが起こった要因として、オーストリア＝ハンガリー君主国のオーストリア議会で繰り広げられていた民族間の権利主張にあるとしている。ロート曰く、その民族間の闘争の中で「ユダヤ人はいつも負けてばかりの第三者だった。そこで彼らは奮い立ち、一つの、自分たちの国籍、すなわち、ユダヤ国籍へ属することを公言したのだった。彼ら自身のための「土塊」をヨーロッパには見つけられなかったので、その代わり彼らはパレスチナの故郷へ帰ろうと努めたのである。彼らはそれまでずっと亡命生活を送って来た人間だった。彼らはいまや亡命する民族となったのである。彼らは、ユダヤ民族の代表をオーストリア議会に送り、最も基本的な人権すら認められていないうちから、他の民族と同じように、民族的権利と自由を勝ち取るために戦い始めたのだった。[11]

先ほど取り上げた国際ロマ連盟との共通項は、ここに色濃く見られる。すなわち、シオニストは自らを「亡命の民族」として、「土地を持たない民族」として定義してこそ、自らをヨーロッパ的文脈の中の一民族として成立し得ると考えたのである。このことは、国際ロマ連盟が「国際ロマ憲章　International Romani Union Charter」を採択し、自らの拠り所を「ディアスポラ的であること」、「住む土地は常に外国であること」に求めたことに良く似ている。

こうしたシオニズムを支える民族観を、ロートは痛烈に批判している。

> …「民族」や祖国で構成されていることが、世界の意義となりうることは決してない。その民族や祖国は、例え自己の文化的特性を維持することのみを

望んでいるとしても、そのために一人の人間の生命を犠牲にする権利などはないはずだ。…もしいつか正当な歴史が書かれる日が来たら、ユダヤ人が高く評価される事になるだろう。というのは、全世界が愛国主義的な狂気に没頭していた時代に、ユダヤ人は祖国を持たなかったが故に理性を保ちえたからである。[12]

「放浪のユダヤ人」において、流入したヨーロッパ諸国に同化して生きざるを得ない東方ユダヤ人に悲哀の目を向けるロートは、一方でシオニズム運動に走るユダヤ人に対して批判の姿勢を見せている。ハンガリー出身のユダヤ人ジャーナリスト、テオドール・ヘルツル　Theodor Herzl(1860-1904)が提唱し広めたシオニズム運動はまさしく西の民族思想、国家思想から生まれたものであり、シオニズムに基づいて民族的独立を求めるユダヤ人はもはやユダヤ人とは言えない、という見地からである。[13]

それゆえにロートが描くオーストリア＝ハンガリー君主国は、ロートが理想としていた、異なる民族の緩やかな繋がりが実現されたものであり、西の思想とは相容れない国家体系を保持している。「同じ民族、文化、起源、言語」といったものにとらわれる事のない、異質な者達が混在ししかし有機的に結びついて暮らす在り方を示すロート的多民族主義は、その地理的配置にも特徴がある。多民族主義は、西方的な統一性Homogenitätではなく、異質性Heterogenitätが認められる場所、と解釈出来るが、ロートはその異質性が実現される場所として、帝国周縁の御料地Kronlandを頻繁に取りあげた。1918年の解体まで、オーストリア＝ハンガリー君主国は18の御料地を有していた。ボヘミア、ハンガリー、ダルマチアに並び、ロートの故郷であるガリツィアも帝国の周縁を形成する地域であり、多種多様な民族が共生する場として、中心地ウィーンと対置されて描かれる。

3. 多民族共存の場としての周縁

ロートの故郷ガリツィアは、東方ユダヤ人が小邑Schtetlを形成し生活する場所であり、特にロートが生まれたブロディBrodyはユダヤ人が住民の多数を占めていた。ロートがウィーンで学び、その後ジャーナリストや作家として活躍するよ

うになる過程で、自身はガリツィア出身である事実を語ることはなかった。[14] 1924年にジャーナリストとして執筆した旅行記「ガリツィアの旅 Reise durch Galizien」では、西のジャーナリストが彼の地へ旅した体でその土地の印象が書かれている。

> ヨーロッパはここで終わっているのか？ いいや、そうではない。ヨーロッパとこのいわば見捨てられた土地との繋がりは、普遍で生き生きとしたものである。…ガリツィアは世界から見放された孤独の中にあるが、かといって隔絶されているわけではない。放り出された土地ではあるが、かといって切り離された土地ではない。外界との繋がりは乏しいものであるにも関わらず、そこには数多くの文化があり、乱雑、それ以上に奇異なものが存在している[15]

教育を受けた後は西の諸国で活躍したロートは、まさに「放浪のユダヤ人」で悲哀を込めて描かれた「西に同化した東方ユダヤ人」そのものである。自らの出自を長い間隠していたロートではあるが、1920年代から死の直前まで、ガリツィアを多くの文学作品の舞台として選んでいる。その中には「蜘蛛の巣 Spinnennetz 1923」、「ヨブ　Hiob. Roman eines einfachen Mannes 1930」、「ラデッキー行進曲　Radetzkymarsch 1932」、「偽りの分銅　Das falsche Gewicht 1937」、「カプツィン納骨堂　Kapuzinergruft 1938」などの作品が含まれる。

「カプツィン納骨堂」の主人公フランツ・フェルディナンド・トロタの友人として登場するホイニッキィ伯爵はガリツィア出身であり、辺境の土地が君主国に対して持つ重要性を語っている。

> この君主国は…奇異な事など一つもない。…私が言いたいのは、いわゆる奇異と思われるものは、オーストリア＝ハンガリーにとっては当たり前のものだということだ。また、もろもろの国民国家やナショナリズムがせめぎ合い狂気に満ちているこのヨーロッパにとってそこ、この当たり前の事が奇妙に思えるのだ。…紳士諸君！オーストリアの本質は中心ではなく、周縁にある。…オーストリアの実質的な力とは、君主国の御料地によって養われ、絶えずその力は補充され続けるのだ。[16]

多種多様な民族が入り交じり生きる辺境の地こそ君主国の根幹であり、君主国全

体を下支えする存在である、というホイニッキィ伯爵の主張は、ロートが既に解体した祖国に哀悼の念を込めて理想化した国家の在り方を体現したものであると言える。

ロートと同時代に生きた作家ハイミート・フォン・ドーデラー Heimito von Doderer(1896-1966) もまた、既に無い祖国を理想化して描き、オーストリアのアイデンティティを定義することを中心的な課題とした。ドーデラーもまた、君主国のエッセンスは「様々な文化的要素の融合[17]」であるとし、東方に位置する平原はマジャール的要素を、南方の山岳地帯は地中海地域の文化的要素を体現するものだと語っている。そのような空間的広がりを重要なものだとしながら、ドーデラーは国家のアイデンティティの中心として首都ウィーンを挙げており、その時間的重要性を特に強調している。1945年8月14日の自身の日記においてドーデラーは、オーストリアを都市国家と位置づけ、その中心地であるウィーンは「全てが内包され、交差する点[18]」であるとし、そこに辺境の地域が従うという構図を提示している。

ドーデラーもロートも共に、多様な文化的要素の融合という点にオーストリア＝ハンガリー君主国の特殊性を見た点には共通項がある。しかしながら、東方ユダヤ人として生まれ、西に同化して生きることを選択したロートは、「民族」を定義する事に対してより複雑な見地を取らざるを得なかった可能性がある。西方では少数派として抑圧を感じ、その一方で故郷の東方ユダヤ人との隔絶を体感する。「ユダヤ人」としてのアイデンティティの揺らぎに直面する一方、民族の定義を巡る問題にも突き当たる。君主国の崩壊により辺境のユダヤ小邑は徐々に解体され、東方ユダヤ人は西に同化するか、シオニストとして領土を勝ち取り、「民族的独立」を果たすか、の二択を迫られる事となる。つまり、ロートにとっては「ユダヤ性」そのものが消失する局面が近づいていることになる。ロートが生涯にわたって描こうとした理想的多民族主義国家としてのオーストリア＝ハンガリー君主国の背後には、こうしたユダヤ人のアイデンティティを巡る二つの苦悩が大きく影響していると結論づけられる。

4.「移民」によるパラダイムシフト

「移民」として生きるという、ロートが生涯かけて取り組んだテーマは、現在

ヨーロッパが直面する課題に深く関わるものである事は想像に難くない。伝統的な移民であったユダヤ人、ジプシーに加え、90年代に激増したトルコ人がいた。そして現在数多く流入してくるイスラム圏からの移民は、今後「ヨーロッパ」という枠組みに変化をもたらすことになるだろう。ヨーロッパに入り生きるイスラム教徒は、異なる出自、文化、言語を背負う存在として疎外感を感じ、同時に西の文化に触れた存在として故郷の同族人との隔絶を感じるようになるだろう。一方、今後多くの移民を受け入れるヨーロッパもまた、共同体としてそのアイデンティティが揺らぐのを防ぐことは出来ない。われわれは習慣的に、「共同体」や「民族」という概念を自明のものとして捉え用いている。ところが、本稿で取り上げたユダヤ人とジプシー、そして現在ヨーロッパに押し寄せているイスラム教徒は、「放浪し、移民となる」行動によって、大規模なパラダイムシフトを起こす存在である。彼らが生み出すのは、多数派と少数派の間の衝突や交流のみではなく、移民に関わる全ての人や地域に個人として、グループとしてのアイデンティティを揺るがし、再考の余地を与える。

国家、民族、共同体とは何に依って立つものか、普段疑いを持たないそのような概念は、実は時代や状況に左右され書き換えられていくものであることが浮き彫りとなるのである。

註

1 Hannah Arendt: *Rahel Varnhagen : Lebensgeschichte einer deutschen Jüdin aus der Romantik*. Frankfurt am Main 1974, S.35

2 Ebd. S.203-204

3 Joseph Roth: *Juden auf Wanderschaft*. in: Ders.: Werke. Bd. 2. Das journalistische Werk 1924-1928. Köln 1990, S.842

4 Ebd. S.842

5 Ebd. S.842-843

6 Ebd. S.843

7 Khamoro International Roma Fesiaval 2010年　パンフレットより

8 久野聖子 『ヒターノであり、スペイン人であること：ヒターノの土着性についての一考察』 同志社大学言語文化　第12号　2009年8月、 144頁

9 ブダペスト出身のジャーナリスト、テオドール・ヘルツル。シオニズム運動の提唱

者。

10 Joseph Roht: *Juden auf Wanderschaft*. S.834

11 Ebd. S.834-35

12 Ebd. S.837

13 David Bronsen: *Joseph Roth. Eine Biographie*. Köln 1974, S.117-118

14 Ebd. S.32

15 Joseph Roth : *Reise durch Galizien*, in Ders.: Werke. Bd. 2. Das journalisitsche Werk. S.284-285

16 Joseph Roth : *Die Kapuzinerguft*. in Ders.: Werke. Bd. 6. Romane und Erzählungen, Köln 1990, S.234-235

17 Sławomir Piontek : *Der Mythos von der österreichischen Identität*. Frankfurt am Main 1999, S.141

18 Heimito von Doderer : *Tangenten. Tagebuch Eines Schriftstellers 1940-1950*. München 1964, S.364